

# 絵具遊び活動の検証

—高知大学教育学部附属幼稚園での実践を通して—

野角 孝一、土井原崇浩、玉瀬 友美（人文社会科学系教育学部門）  
谷脇のぞみ、岡谷 里香、都築 郁子、森下 英恵（高知大学教育学部附属幼稚園）

## A Study of Paint Play Activities : Through the practice in the Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

Kouichi Nozumi, Takahiro Doihara, Yumi Tamase

(Kochi University Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit)

Nozomi Taniwaki, Rika Okatani, Ikuko Tsuzuki, Hanae Morishita

(Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University)

### 要 約

本研究は、K市にある大学の附属幼稚園において、巨大な支持体を用いた絵具遊び活動を試みたものである。本研究における絵具遊び活動とは、特定のモチーフを設定せず、園児達に絵具を用いて自由に遊んでもらう活動のことを指す。附属幼稚園の園児達は四つ切や八つ切りの画用紙に絵具やクレパスやペンなどを使用して描いているが、巨大な支持体や大量の絵具を用いる絵具遊び活動を通して、普段とは異なる描画材を用いることで園児達にどのような変化が見られるかを検証した。その結果、体全体を使った表現や、絵具の特性を活かした見たてによる遊びへと変化する様子が窺えた。また活動によって絵具が塗られた巨大な支持体に着想を得て、さらなる遊びへと展開する事例が見られ、今後の活動に活用できる結果が得られた。

キーワード：絵具遊び活動、体験、共同制作

### 1. はじめに

現代の日本では様々な便利なものが開発される一方で、想像力の基となる描画材や道具を扱う機会が減っている。そのため絵具の混色の方法がわからない、鉛筆をカッターで削ったことがない、墨を擦ったことがないなど、描画材や道具の特徴を知らない大学生がいるという現状がある。そういった学生への聞き取りでは、幼児期あるいは小学校期での描画材や道具を扱う経験が乏しく、それによって図工・美術に対して苦手意識を持っていることがわかった。高浦（1991）の指摘では小学6年生の風景写生の児童自身のつまずきの帰属原因として色に関わる事項が多く、「思い通りの色が出ない」「絵の具がうまく使えない」などが挙げられている。また高学年になるにつれてその傾向が高くなるとしている。そのつまずきから大学生が持つ美術への苦手意識へとつながっていることは容易に推測でき、本研究では原因の一つと考えられる絵具や色に関するつまずきや苦手意識を、幼児期における絵具遊びを通じた楽しい経験によって解消したいと考える。

平成20年度告示の幼稚園教育要領の「表現」において、（1）「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」（7）「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」という内容が記されており、幼児期において描

画材や道具を扱う機会を設けることは、言葉以外の表現方法の幅を広げるために重要であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、附属幼稚園の園児を対象として、巨大な支持体を用いた絵具遊び活動を行う。大きな支持体と大量の絵具を使用するなど普段とは異なる環境で絵具遊びをするため、描く動作がより大きくなり、いつもより大胆な活動となることが予想される。また使用する道具として筆の他に、スポンジやローラーなどを用意し、何か特定のモチーフを描くのではなく絵具を使って遊ぶことによって楽しみながら絵具に触れることを目的とする。

## 3. 研究時期と研究の対象者及び活動場所

絵具遊び活動① 2015年12月14日（月） K市にある大学の附属幼稚園年中児42名  
（大学内幼児教育実習室）

絵具遊び活動② 2016年6月10日（金） 同年少児28名（附属幼稚園年少組前庭）

絵具遊び活動③ 2016年6月21日（火） 同年中児39名（附属幼稚園遊戯室）

### 4.1 絵具遊び活動①

はじめの試みとなる絵具遊び活動①では、大学教員と附属幼稚園教諭との間で事前に協議を行い、まずは絵具を用いて何かを描かなくてはならないという抵抗感を和らげることを最優先としたため、絵具で遊ぶという方法を採り、特定のテーマを設定しないこととした。大学の演習室を活動場所とし、部屋全体をビニールシートなどで養生し、床面全体にロール紙を広げた他、壁面にもロール紙を設置した。使用する道具として筆の他に雑巾やモップ、スポンジなど、通常は別の意図で使用する道具を描画材として使用することによって、普段とは異なる役割の使い方を見出し、園児達に新鮮な感覚と想像力を養うように工夫する。絵具は市販のものを購入し、事前に混色して、原色でない色（桃色・水色・クリーム色・薄紫色・緑色・黄緑色・朱色・山吹色・赤茶色・金色・銀色）を準備した。その理由として絵具は混色できるため、混色した色の良さを感じてもらうためである。また、園児や保護者には活動に際して、予め服を着替えることを伝えているため、汚れることを気にせず活動に参加することができるよう配慮した。

実際の活動の導入では、スポンジを例として、園児達に「これは何に使うものか知ってる？」と問いかけ、園児達が「おちゃわんを洗うやつ！」という対話を行いながら、興味を引くように説明を行った。スポンジを絵具の入ったバットにつけ、床に広げた紙に塗る実演を行うことで、園児達にどのような活動を行うのかということを知りやすく伝えた。

事前の予想では、絵具に触れるのを怖がり徐々に活動に参加すると推測したが、実際にモップなど大きな道具の奪い合いになり、数分で床に広げた紙が、絵具で埋め尽くされていった。はじめは絵具を塗ることに専念していたが、自身で絵具を混色することに専念する園児や、濃度の高い絵具だったため、手や足などでぬるぬるする感触を楽しんでいる園児などが見受けられた。一度塗られた上からさらに絵具を重ね、色が変わるのを観察するなど、混色への興味が見て取れた。また、絵具に触れることを苦手としている園児も附属幼稚園教諭との会話や、お互いの手や足に絵具の塗り合うことによって、次第に絵具に触れることができ、次第に表情も笑顔となった【図1】。



【図1】 絵具遊び活動①の様子 モップなどの道具や手や足で絵具を塗っている

活動後に園児一人一人に感想を聞いたところ、楽しかったとの意見が多く、楽しみながら絵具で遊ぶという目的は達成できた。また濃度の高い絵具を重要視したため、意図せず園児達は絵具のぬるぬるとした感触を味わうこととなった。生活の中でぬるぬるとした感触を味わうことは少ないので、貴重な経験となったと言えよう。

課題としては、予想以上に園児の活動が活発で、床面に広げた紙が足りなくなり、急遽何度か追加することとなった。また使用したロール紙が脆弱で、濃度の高い絵具を使用したため、水分を含んですぐに裂けてしまう事態となり、そのため事前の協議において活動で使用したロール紙を幼稚園で展示するという話もあったが、実現はしなかった。

## 4.2 絵具遊び活動②

絵具遊び活動①の課題を踏まえ、絵具遊び活動②では絵具を塗る支持体として高知和紙を選択することにした。高知和紙は福井県の雲肌麻紙と並ぶ日本画用和紙であり、その特徴は2m×3mという大きさに加え、強靭さがあり、活動後に展示することを踏まえると、最適であると考えられるからである。絵具は市販のものを購入し、事前に混色して、原色でない色（桃色・水色・クリーム色・薄紫色・緑色・黄緑色・朱色・山吹色・赤茶色）を準備した。尚、絵具遊び活動②では附属幼稚園で普段使っている絵具を混色して用いることを優先したため、金色と銀色を外した。また今回の対象が年少児であるため、絵具遊び活動の前段階として、本番の活動で園児達が緊張しないように、前々週に通常の画用紙を用いた絵具遊び活動に大学の教員も参加した。また絵具遊び活動②では園児達が参加しやすいように、絵具遊び活動①のように一斉に始めるのではなく、朝からの活動であったため、ある程度の人数が揃った時点で、その都度活動の説明をしながら自由に参加できるようにした。

絵具遊び活動②が年少児対象ということもあり、園児達が様々な活動を選択できるように支持体を地面に広げた状態での絵具遊び活動や、足跡による絵具遊び活動、壁画式による絵具遊び活動の3種類の活動方法の準備を行った。本項では特に壁画式による絵具遊び活動を中心に園児達の様子について検証していく【図2】。



【図2】壁画式による絵具遊び活動

壁画式による絵具遊び活動では、幼稚園の小規模な水の入っていないプールの壁に和紙を固定し、絵具、筆、混色用にプリンカップを準備した。普段はない和紙や絵具が設置してあったので、朝早くに登園した園児達がとても興味を示していた。そこで園児達に絵具を混ぜることを促し、何を描こうか楽しそうに話しながら、他の園児達の到着を待ってもらった。ある程度の人数が集まった時点で、実際の活動が始まると、ある園児は筆に紫色の絵具をたっぷり含ませて、絵具を垂らすように描いていた。何を描いているのか尋ねたら、「雨」という答えだった。大学の教員が水色の絵具で点々を描いて、「これも雨に見えるかな？」と尋ねたら、見えないという答えだった。その園児にとっては、雨の色や形というより、絵具が垂れる様子を雨と見たてているようであった。この絵具の垂れるという現象も、床や机で絵を描くことでは経験できない壁画式による絵具遊び活動の特徴の一つといえよう。

その後もたくさんの雨を描き進めると、他の園児達が加わってきた。その際、絵具を和紙に塗る際に、偶然泡が発生した。園児達はその泡にとっても興味を示し、泡が発生するように絵具の分量や筆使いを工夫していた。また別の園児達は用意したプリンケースに穴があいていることを発見し、そこから垂れる絵具のおもしろさに興味を示し、絵具を雨に見たてて床に垂らして遊んでいた。はじめはにこにこしながら活動していたが、次第に「ぴちゃ、ぴちゃ」と雨の音を声に出しながら遊んでいた。さらに活動が展開し、プリンカップに新しい絵具を入れ、別の容器に移し替えて、「実験、実験」と言いながら違う色にする混色実験を行っていた。絵具は壁面に塗るための混色ではなく、「混色したらどんな色になるのか」というところに興味が向いていた。園児達同士で混色した絵具を見せ合い、競って同じ色や違う色を作ることを繰り返していた。

そういった状況の中である園児Aに注目した。園児Aは前々週に行った画用紙を用いた絵具遊び活動では、他の園児達と会話をせず、ほとんどの園児達が活動を終えても、集中して何枚も絵を描いていた。今回の活動では、最初は筆を渡して、共有の絵具を使うように促したが、あまり乗り気ではなかった。そのためプリンカップを渡したところ、混色の方法を少しだけ伝えたと絵具を混色し繰り返していたが、他の園児達との混色実験には加わらず、一人でプリンカップそのものに絵具を塗り始めた。混色した絵具で壁面の和紙に塗るように促したが、すでに他の園児達が描き始めていたためか、壁面の和紙に絵具を塗るといふことにほとんど興味がないようであった。その後は、何度か声かけをしていたこともあり、混色するたびに大学の教員に新しい色を見せるようになった。混色した色は特定の何かを表したのではなく、何を表した色か尋ねても答えなかった。そこからプールの壁面に付着していた茶色い土の色に、とても興味を示し何度も混色して、その色の再現に



夢中になっていた。その後はプールの蛇口を発見し、何度も混色を繰り返し、きれいな緑色を作って、楽しそうに塗っていた。

これまで以上に笑顔で効果音をつけながら塗っており、少し塗り重ねると、「見よってよ！」と大学の教員に初めて声かけしてきた。園児Aは自分から他の園児達に積極的にコミュニケーションをとる場面は少ないように感じていた。しかしほとんど初対面である大学の教員に自分から声かけをするまでに至ったことは、普段できない絵具遊び活動の一つの成果と言ってよい。またプールの蛇口を塗る行為にとっても満足したのか、混色した絵具を大学の教員の手や服に塗ってきたので、こちらにも手に少しだけ塗り返すと、さらに楽しそうにしていた。しばらく様子を見ると、これまで園児Aは他の園児達との会話はほとんどないように思われたが、自分から積極的に絵具を他の園児に塗ることによって、会話が始まっていた。これも絵具遊び活動による変化としてみてもよいだろう。その園児にとってプールの蛇口は自分だけのキャンバスだったように考えられる。自分が作った色で、自分だけが見つけた場所に、自分だけで塗っていくという行為がその園児の世界感をつくる上でとても大切であり、その基盤ができたことによって、満足感が得られ、他の園児とのコミュニケーションへとつながったと推察される。

絵具遊び活動②を通しての課題としては、地面に広げた状態での絵具遊び活動や、足跡による絵具遊び活動、壁画式による絵具遊び活動という3種類の活動の中で、特に壁画式による活動における園児達の活動時間の短さがある。事前の予想では、絵具遊び活動①のように絵具を塗り重ねていくと考えていたが、予想に反して園児達はある程度和紙の余白部分がなくなると、壁画には興味を示さなくなっており、すでに描かれた画面をさらに塗り替える行為は見られなかった。

#### 4.3 絵具遊び活動③

絵具遊び活動①②の課題を踏まえ、絵具遊び活動③では遊戯室の床にビニールシートを広げ、その上から高知和紙を置いた状態での絵具遊び活動を選択した。和紙は2m×3mの和紙を数枚と半分の大きさにした小さな和紙を用意した。半分の大きさの和紙を用意した理由は、大勢の活動より自分の世界感を重視する園児達が活動を行いやすくするための配慮である。使用する道具は筆の他に雑巾やスポンジなどを準備し、絵具は市販のものを購入し、事前に混色して、絵具遊び活動②と同様に原色でない色（桃色・水色・クリーム色・薄紫色・緑色・黄緑色・朱色・山吹色）を準備した。

実際の活動では園児達は一斉に道具を取り、絵具を画面に塗りはじめたが、活動当初から大きな和紙と半分の大きさの和紙へ分かれており、いずれも園児達もほぼ固定した顔ぶれで活動を行っていた。

年中児は比較的人数も多いため、和紙を取り換える期間が短く、短時間で和紙の予備がなくなった。そこで園児達は手に絵具をつけてお互い塗り合うなど遊び方を工夫していたが、さらに楽しめるように60×90cmの薄手の和紙を別途用意して、絵具遊びを継続できるようにした。また大学の教員がその薄手の和紙をハサミで魚やサメ、イカなどの形に切ったものを園児達に渡し、和紙に絵具を塗って活動を続けた。

その中で園児Bに注目した。園児Bは魚の体全体をピンクに塗った後、青色や緑色に塗られた薄手の和紙を広げ、海に見たてて、自分で塗った魚をどこに配置したほうがよいか検討していた。絵画では画面の中におけるモチーフの配置を構図と言い、絵画を構成する重要な要素の一つである。園児Bは納得いくまで微調整を繰り返し、時間をかけて構図を検討していた。他の園児達がほとんど活動を終えた中で、一人で黙々と作業を続ける姿に自分の世界を作り上げようとするこだわりを見ることができた【図3】。



【図3】構図を検討する園児B



【図4】絵具の上を滑って遊ぶ様子



【図5】みんなで雑巾がけを行う様子

絵具遊び活動③の絵具については絵具遊び活動①と比較して、やや濃度は低いが、大量に用意したため、和紙に絵具を大量に広げて体を滑らせる園児がおり、幼稚園教諭と一緒に絵具のぬるぬるとした感触を活かした遊びも見られた【図4】。

絵具遊び活動③の終了後、幼稚園教諭と大学の教員で後片づけを行っている時、絵具遊び活動①に参加した複数の年長児（絵具遊び活動①の時点では年中児）が様子を見に来ており、今回は自分たちが活動を行っていないにも関わらず、年中児達と一緒に雑巾がけに参加してくれた【図5】。話を聞くと絵具遊び活動①のことを良く覚えており、今回の活動も参加したかったようである。今回の絵具遊び活動に参加した年中児と参加しなかった年長児が一緒になって楽しく雑巾がけに参加してくれたことは、教育上大変意義があることだと言えよう。

後日、活動によって塗られた和紙を年中児の教室に広げていると、和紙を別の遊びに用いたいという要望があった。ままごとが大好きな園児達は、ままごとコーナーに「これで屋根がほしい」ということになり、早速その和紙で幼稚園教諭が屋根と扉を作った【図6】。別の園児達は、大学の教員が作った魚から、イメージが膨らみ、魚釣りをする園児もおり、忍者の隠れ家にもなった【図7】【図8】。絵具遊び活動③から延長した様々な見立てによる遊びが、別の形となって展開された証しと言えよう。



【図6】ままごとコーナー



【図7】魚釣りコーナー



【図8】忍者の隠れ家

## 5. まとめ

本研究では家庭において出来ないような絵具遊び活動①②③を通して、園児達の活動の様子を観察した。

支持体を地面に広げた状態での絵具遊び活動についてはいずれの場合も、ほとんどの園児達は積極的にコミュニケーションを取りながら参加しており、絵具を塗るあるいは混色する行為に対する

苦手意識は見られなかった。はじめは絵具に触るのをいやがる園児達も、活動を行う中で幼稚園教諭とコミュニケーションを取り、次第に絵具に触るようになり、興味を持つようになった。幼稚園教諭の声かけの重要性はもとより、幼稚園教諭自身が楽しく活動に参加する姿勢そのものが園児達へ大きく影響したことはまちがいない。

いずれの活動も支持体に絵具を塗るという行為から、次第に絵具の特徴を理解し、何かに見たて、手や足、体全体を使いながら遊びへと変化する様子が見られた。また絵具を通して遊ぶ行為は、絵具に対する苦手意識を克服するばかりではなく、4.3 絵具遊び活動③の事例のように、ままごとコーナーの屋根と扉となる場合など、こちらの想定を超えて新しい発想の基となることがわかった。平成20年度告示の幼稚園教育要領の「伝える力」の重要性を掲げているが、4.2 絵具遊び活動②での園児Aのように、絵具で遊ぶという言葉ではない表現から自分の世界観を作り、それを拠り所にして言葉でのコミュニケーションへと昇華するきっかけとなっている事例が見られた。絵具遊び活動は単なる遊びに留まらず、自分の考えを表現するあるいは伝える環境づくりの一つの在り方として意義があると言ってよいだろう。

今後の課題として、まず壁画式による絵具遊び活動での工夫が挙げられる。絵具遊び活動①②③における支持体を地面に広げた状態での絵具遊び活動では、園児達は絵具を塗るという行為に興味があり、誰よりも早く和紙の余白を塗りつぶすことに専念する。ある程度余白がなくなっていくと、絵具の混色や絵具自体のぬるぬるした質感などに興味に移る。その際、絵具で遊ぶという事を予め説明していることもあり、園児達の意識として巨大な1枚の作品を全員で作り上げるという意識はないという特徴がある。そのため一度描いた筆致をさらに別の筆致で塗りつぶしてもけんかするような園児はおらず、むしろ楽しみながら活動を行っている。しかし壁画式による絵具遊び活動では、ある程度絵具が塗られた状態から手が入らなくなった。その理由として画面が壁面に固定されているため、画面全体が把握でき、園児達は絵具遊びをしながら画面全体への作品としての意識が働いていると考えられるからである。画面全体への意識が働くことによって、園児達は作品として自分の世界観を画面に求めようとする。しかし複数の園児達の手が入ることによってそれが追求しにくい状況となり、次第に絵具を混色する遊びの方に興味が向いていったことが窺える。そのため今後、壁画式による絵具遊び活動で活動を行う際は、動物園や水族館などテーマを設けて特定のモチーフを制作する方法などを検討したい。

また前述で別の筆致で塗りつぶしてもけんかするような園児はいないと指摘したが、実際は描いたものを塗りつぶされたくない園児達は、絵具遊びする場所を選んでいることが絵具遊び活動の観察によって判明した。そこで絵具遊び活動を行う際、自分の世界感を追求する、あるいは少人数での活動を好む園児のために、小規模な活動を行える支持体や絵具の準備を行うべきなのか、あるいは大人数での活動のみを行い、大学の教員や幼稚園教諭の声かけを行いながら慣れるようにしていくのか、今後検討していきたい。

支持体については絵具遊び活動③のように別の遊びへの展開が見られたのは、絵具遊び活動①での課題であった支持体の脆弱さを強靱な和紙によって解決したことも要因の一つと言えよう。しかし継続して活動を行うことを前提とした場合、経費が問題となる。また絵具遊び活動③のように塗り終えた支持体をさらに加工するなど、様々なことを考慮すると、安価な綿布などの布を用いる方が良いと考えられる。布であれば和紙より大きく、絵具を塗っても耐えられる強靱さもあり、壁面に固定する他、衣装の材料としても容易に加工でき、園児達のさらなる発想の基となることが期待できる。また附属幼稚園内にある、古くなったモニュメントと木の小屋など、普通は絵具を塗ることが出来ないものを支持体とすることも併せて検討したい。

本研究を通して、附属幼稚園教諭と絵画を専門とする大学教員との連携を試みる事ができた。

普段から園児を見ている附属幼稚園教諭と専門的な知見から見る大学教員との共同によって、より多面的な視点から園児達の活動を観察することができる絵具遊び活動の教育効果は高いと考えられる。今後も連携を密にして双方の長所を引き出しながら、園児の発達段階を踏まえ、より良い教育環境を整えていくことが重要であろう。

### 謝 辞

本研究を実施にあたり、高知大学教育学部長裁量経費の助成を受けました。記して感謝の意を表します。

### 引用文献

- ・高浦浩「児童の描画表現のつまずきと自己認識の相関について」美術教育学・美術科教育学会誌 (12), P135-144, 1991年3月30日
- ・文部科学省『幼稚園教育要領（平成20年告示）』  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm)（2016年9月26日参照）

### 参考文献

- ・鮫島良一・馬場千晶著『保育園・幼稚園の造形あそび』成美堂出版，2014年4月